

心理学研究室報

平成24年度 専修大学人間科学部心理学科 大学院文学研究科心理学専攻

I. 専修大学心理学研究室

人間科学部心理学科報告 (長田洋和学科長)

今年度も、恒例となりましたフレッシュマンキャンプを2012年4月21~22日、伊勢原セミナーハウスで行いました。実行委員が中心となり、入学したばかりの新生生にとっては、とても有意義なプログラムであり、今後も継続して行われていきます。

今年度の心理学科のメインイベントは、何と言っても、山上教授が大会長を務めた日本心理学会第76回大会です。9月11日~13日の3日間、生田キャンパス9号館、10号館をメイン会場として開催されました。大会自体は3日間でしたが、石金准教授が事務局長となり、心理学科専任教員が一丸となって綿密な準備を行い、実に2年に渡る長丁場でしたが、大成功に終わったと自負しても良いと思います。サプライズとしては、秋篠宮紀子妃殿下がご参加下さったことでしょうか。下斗米教授が中心となり恙無く無事成功に至りました。その他、心理学教室OBの方々を含め、まさに総動員でした。この場を借りて、皆様に感謝申し上げたいと思います。

その他、オープンキャンパスでの心理学実験室ツアー、模擬授業、および個別相談や、高等学校から依頼された出張授業など、様々な行事に対して、専任教員が都度対応しております。

文学研究科心理学専攻報告 (岡村陽子研究科委員主幹)

大学院文学研究科心理学専攻では、本年度は修士課程にはM1は14名(基礎1名、臨床13名)、M2は15名(基礎3名、臨床12名)、M3は2名(内臨床2名)の31名が在籍しております。博士課程には、D1に1名、D2に3名、D3に2名、D4に1名、D5に1名と8名が在籍し日々研究に勤んでおります。本年度は、修士課程では12名が修士論文を提出し口述試験を全員無事合格しました。博士課程では澤研究室の板坂典郎さんが博士号を授与されました。大学院全体では、総勢39名の大所帯ですが、今後もますます教育や研究体制を充実させる予定です。

II. 心理学教員研究室報告

14名の専任教員で構成されています。今年度は、吉田弘道教授が国内研究員でした。以下は、各教員研究室年度報告です(姓のアルファベット順)。

藤岡研究室 (心理査定学)

藤岡研究室では、心理査定学としては、ロールシャッハ・テストを中心に研究を進め、心理療法としては、認知療法の立場で研究を進めています。最近、発達障害と他の精神疾患

との鑑別の困難さが問題とされ、また認知行動療法においては詳細な心理査定が求められるようになり、心理査定の重要性が再認識されてきたと言えます。学部の3・4年生を対象とした「心理学研究法1・2」においては、心理査定に欠かすことのできないロールシャッハ・テストの研究を主として行い、3年生では、ロールシャッハ・テストの施行法・スコアリング・解釈法までを学びます。4年生では、卒業論文に向けて、テーマに沿ってロールシャッハ・テストのデータの収集、分析、さらに文献研究を行っています。また、大学院生を対象とした「臨床心理学特講I」「臨床心理実習」「臨床心理学特殊研究I」においては、認知療法に関する講義、実習ケースに対して認知療法の立場からのスーパーヴィジョンなどを行っています。

今年のゼミの夏合宿は、伊東市(伊豆半島)にある「ルネッサ赤沢」で、2泊3日で行いました。参加者は、学部生4年が1名、3年が5名、大学院生2年が3名、1年が2名で、計11名の参加者がありました。最近の課題である「うつ病を治す」(野村総一郎著 講談社現代新書)を読み、議論を交わしました。夏合宿では、バーベキューは、やるものではないということを学びました(暑すぎます)。

諸活動

藤岡新治(2012). 論文コメント 村田航「短期で面接が中断した中学生3年生男子ケース」へのコメント 専修大学心理教育相談室年報 第18巻 p.127.

藤岡新治(2012). 学会シンポジウム企画・司会 「日本のEAPの現状と今後の課題」 日本心理学会第76回大会 専修大学.

藤岡新治(2012). 座長 小川真紀・荒川和歌子「単回性PTSDと複雑性PTSDのロールシャッハ・テスト反応」 日本ロールシャッハ学会第16回大会 明治大学

藤岡新治(2012). 平成24年度科学研究費補助金を受け、「データベースを用いたロールシャッハ解釈支援システムの構築」(基盤研究(C):研究分担者)のテーマにより、データの収集を行っている。

日本ロールシャッハ学会 監事

多摩区精神保健福祉連絡会議 委員

乾研究室 (臨床心理学)

乾研究室は、人間の無意識過程の探索や深層心理学の理解を主たる研究課題としています。学部研究法では「投映描画法」を、大学院修士課程や博士課程では「心理療法の治療機序」を検討しています。大学院の博士課程のゼミ生が修了しましたが、博士課程の科目等履修生2名の参加を得て、修士2年2名と精神分析的な心理療法の治療機序とその精神力動の理解を深めています。学部ゼミ生は4年生5名が卒論作成に懸命に取り組み、「自由画研究」や「ハンドテスト」「投映家族画」などの描画法をもとに、かなり深まった検討を行っています。一方ゼミ3年次生の7人のメンバーは、9月以後後期に入った早い時期からブレ・卒論の課題に取り組むなど意欲的な学生が多くゼミが活性化して意欲的です。学部ゼミでは4限、5限の中間で3年・4年生の合同ミーティングが

ありますが、その席で参加者の一人が毎時間「3分間スピーチ」を課せられるのです、後期になり各自が自由にスピーチを人前で出来るようになってきています。その時には湯茶やお菓子を頂きながら話を聞くので、その効果もゼミを活性化させているかもしれません。乾は今年度で定年退職になりますが、臨床心理学の理解とさらにこのゼミで学んだことがゼミ生の今後の人生に役立てることになれば望外の幸せと思っています。

諸活動

乾吉佑 (2011). 心理臨床の基礎としての精神分析. 臨床心理学, 11巻6号, 787-792. 金剛出版. 2011. 11. 10.

乾吉佑 (2012). 産業心理臨床のコツ. 東京国際大学大学院講演. 2012. 1. 21.

乾吉佑 (2012). 心の全体像を見渡すことのむずかしさ. 精神分析研究 56巻1号, 79-81. 2012. 2. 25.

乾吉佑 (2012). 並行親面接の技法. 関西国際大学大学院講演. 2012. 3. 3.

乾吉佑 (2012). 資料「精神分析と箱庭」箱庭療法研究, 25巻1号, 111-136. 2012.

乾吉佑 (2012). 力動的な心理療法の事例検討. ノートルダム清心女子大学児童臨床研究所開設10周年記念事例検討会. 2012. 5. 19.

乾吉佑 (2012). 臨床心理士養成と心理臨床実践. 福岡女学院大学大学院人文科学研究科開設10周年記念講演. 2012. 6. 23.

乾吉佑 (2012). 患者理解のために知っておくこと. 聖マリアンナ医学部精神療法センター講演. 2012. 7. 6.

乾吉佑 (2012). TLS (トータル・ロックトインスターナ) について考える. 国立相模原病院神経内科研修会. 2012. 8. 1.

公益財団 精神分析武田こころの健康財団 理事
財団法人 日本臨床心理士資格認定協会 評議員
財団法人 小寺記念精神分析研究財団 評議員

石金研究室 (生理心理学・脳科学)

私たちの研究室では心の器官である脳における情報処理を研究しています。平成23年度の人員構成は、教員1名、大学院博士後期課程1名、学部生6名でした。本研究室では情報処理中の人間の脳活動を測定する研究と動物を使用して視覚の神経基盤を調べる研究を行っています。脳活動を測定する研究では、人間が何かに注意を向けた時に活動する脳の領域とその特性を調べています。また、視覚の神経基盤を調べる研究では、比較的単純な視覚誘発性行動と神経活動との関連から、視覚成立の基礎となる神経基盤を解明することを目指しています。平成24年度のゼミ合宿は山中湖にきました。宿泊施設からひんやりとした地下室を提供していただき、深夜までゼミ発表を行いました。

諸活動

石金浩史・榎本ゆかり (2011). 小型脊椎動物の視運動反応を用いた運動残効の神経基盤に関する研究. 日本基礎心理学第30回大会 (慶應義塾大学日吉キャンパス, 横浜).

石金浩史 (2012). ニューロンによる情報表現の実証的研究について. 専修人間科学論集: 心理学篇, 2, 21-25.

原澤賢充・南部政智・北崎充晃・石金浩史 (2012). 差動皮質応答による空間的注意位置関連領域の同定: fNIRSによる研究. 第20回VR心理学研究会 (室蘭工業大学, 室蘭).

Harasawa, M., Nambu, M., Kitazaki, M., & Ishikane, H. (2012). Differential phase-encoded method revealed location of spatial attention related activities in parietal, temporal and occipital cortex: an fNIRS study. ECVP2012 (Alghero, Italy).

Nagahata, M., Okamura, Y., & Ishikane, H. (2012). Attentional bias for body and food in healthy females. The 35th Annual Meeting of Japan Neuroscience Society (Nagoya Congress Center, Nagoya).

長畑萌・石金浩史 (2012). 健康女性における身体・食物に関する認知の研究. 日本心理学会第76回大会 (専修大学生田キャンパス, 川崎).

日本心理学会第76回大会準備委員会 事務局長

日本心理学会 代議員

日本基礎心理学会 幹事

日本基礎心理学会 理事

視覚科学フォーラム運営委員

村松研究室 (非行・犯罪心理学)

研究室では主に、非行・犯罪心理学、非行臨床を研究しております。平成24年度は大学院生 (博士課程1名, 修士課程3名, 学部学生6名) が所属しており、少年犯罪の再犯予防のための家族療法からの実践的アプローチを主に研究しております。非行臨床に関する研究成果は、矯正研修所 (法務省), 裁判所職員総合研修所 (最高裁), 児童相談所 (千葉市・横浜市), 国立武蔵野学院 (厚生労働省) などにおいて研修, スーパービジョンという形式で発表しております。実務家に対してより高度な非行臨床の技術を提供することで研究と臨床現場の意味のある連携を目指しております。また、非行臨床の分野における優れた臨床家の育成も研究室の重要な役割の一つであります。

諸活動

村松励 (2012). 非行・犯罪・裁判. 新曜社 (共著), 東京.

村松励 (2012). 日本心理学会第76回大会. シンポジウム「少年非行と発達障害」企画・司会・指定討論

村松励 (2012). 日本カウンセリング学会第45回大会. シンポジウム「非行化した少年の立ち直しをどのように支えるのか—児童自立支援施設における支援の実態—」指定討論

村松励 (2012). 書評: 非行・犯罪少年のアセスメント—問題点と方法論—. 金剛出版. 臨床心理学, 12(4), 615-616.

日本犯罪心理学会会長 (平成24年9月~)

中沢研究室 (知覚心理学)

この研究室では、外界からの感覚・知覚的情報を心がどのように処理しているかについて、またその結果として生じる

知覚像がどのような性質をもっているのかについてを調べる研究を行っています

これまでの学生さんによる研究は、「文字の読みやすさの要因」「フォントによる語の印象への影響」「言語の情動価と記憶」「偶発学習と記憶」「motion induced blindness (運動する刺激によって周辺視野の静止刺激が知覚されなくなる現象)」「視覚情報による嗅覚情報への干渉」「音楽の印象をつくる要因」などのテーマでなされてきました。

平成24年度の学生メンバーの研究のテーマは、視覚情報の global/local 性、主観的輪郭図形の……、視覚情報と時間知覚の相互作用、視覚情報による人物認知、視覚情報による課題への干渉作用、音楽聴取における身体感覚の影響、嗅覚情報の記憶など多様な切り口からヒトの知覚のはたらきを明らかにしようと試みています。

岡田研究室 (心理統計学)

私たちの研究室では、心理統計学の研究を行っています。心理学の各領域の研究では、様々なデータを扱います。たしかに知見を得るためには、データに基づいて議論をすることが不可欠だからです。そのデータをどのように「料理」して、価値や意味のある「おいしい」情報をとり出すことができるのか、という問題を扱うのが心理統計学です。

昨年度に引き続き、本年度も夏季休暇中には東京工業大学の心理統計学研究室と合同で合宿を行いました。本研究室の学生たちも、東工大の心理統計学を専門にしている大学院生との研究の話や交流を楽しんでいたようです。今年度は、本研究室初の卒業生が誕生する見込みです (2012年12月現在; 本稿執筆時点では卒業論文の仕上げに追われているようです)。統計学をよって立つ柱とし、心理学をフィールドとして、これからもさらに実践的な研究に取り組んでいきたいと思ひます。

諸活動

Okada, K. (2012). A Bayesian approach to asymmetric multidimensional scaling. *Behaviormetrika*, **39**, 1-14.

大久保街亜・岡田謙介 (2012). 伝えるための心理統計: 効果量・信頼区間・検定力. 勁草書房.

千野直仁・佐部利真吾・岡田謙介 (2012). 非対称 MDS の理論と応用. 現代数学社.

Singer, J. D. & Willett, J. B. 菅原ますみ (監訳) 松本聡子・松浦素子・尾崎幸謙・室橋弘人・高橋雄介・岡田謙介・山形伸二 (訳) (2012). 縦断データの分析 1—変化についてのマルチレベルモデリング—. 朝倉書店.

岡田謙介 (2012). 因子数が明らかでない場合の信頼性のベイズ推定. 独立行政法人大学入試センター 入学者選抜研究機構報告書, **7**, 71-79.

Okada, K. (2011). Bayesian inequality constrained multidimensional scaling. The 4th International Conference of the ERCIM Working Group on Computing & Statistics (London, UK).

Okada, K. (2012). Bayesian analysis of asymmetry by the slide-vector model. 4th Japanese-German Symposium on

Classification (Kyoto, Japan).

岡田謙介 (2012). 直積空間法によるベイズファクターを用いた多次元尺度モデルの選択. 日本計算機統計学会第26回大会 (香川県).

Okada, K. (2012). Bayesian model averaging in factor analysis to estimate factor reliability. International Society for Bayesian Analysis 2012 World Meeting (Kyoto, Japan).

Okada, K. & Mayekawa, S. (2012). Dealing with Rotational indeterminacy in Multivariate Bayesian Models. The 2nd Institute of Mathematical Statistics Asia Pacific Rim Meeting (Tsukuba, Japan).

岡田謙介・前川真一 (2012). 多群探索的構造方程式モデリングにおける一般化拡大プロクラステス回転. 統計サマールセミナー 2012 (静岡県).

Okada, K. (2012). A Bayesian Asymmetric MDS for the Radius-Distance Model. Joint meeting of Japanese and Italian Classification Societies 2012. (Anacapri, Italy).

岡田謙介 (2012). 非対称半径距離モデルのベイズ推定とモデル選択. 日本計算機統計学会第26回シンポジウム (東京都).

岡田謙介 (2012). 心理学研究における効果量の活用と報告—APAの指針をふまえて—日本教育心理学会第54回総会チュートリアルセミナー (沖縄県).

日本心理学会第5回第76回大会 準備委員

日本心理学会 教育研究委員会委員

統計関連学会連合大会 運営委員

日本行動計量学会 運営委員

岡村研究室 (リハビリテーション心理学)

対象は、小児から成人までリハビリテーションの対象となる障害を抱える人々です。様々な障害に対して心理的な構造を明らかにして、どんなアプローチができるのかについて研究しています。研究室には大学院生6名、学部生8名です。ゼミでは特に体験を重視して、様々な施設の見学やボランティア体験をできるだけたくさんできるように考えています。体験の中から本当に必要なこと、興味の持てることをテーマに研究をすることを願っていますが、モチベーションも高い研究をみんなしてくれていると思ひます。私自身の専門は、脳損傷に起因する高次脳機能障害者に対して認知リハビリテーションを実施し、その心理的な効果を検討することです。

2011年度より専修大学心理教育相談室において、高次脳機能障害者の心理相談及び認知訓練教室を実施しています。2012年11月より高齢者対象の集団認知訓練教室も開始されます。臨床活動にもこれから研究室全体で取り組んでいきたいと思ひています。

諸活動

岡村陽子 (2012). 高次脳機能障害のための認知リハビリテーション 統合的な神経心理学的アプローチ 第3章神経学的・神経行動学的回復に関係する要因, 第9章アウェアネスの障害の評価と管理 岡村陽子 (第3章・第9章翻

- 訳), 尾崎誠・上田幸彦(監訳), 47-72(第3章), 227-258(第9章) 協同医書出版
- 岡村陽子(2012). 海外文献紹介「Neuropsychological Rehabilitation: Theory, Models, Therapy and Outcome」岡村陽子, 臨床心理学, **12**(2), 291-293. 金剛出版
- 岡村陽子(2012). セルフアウェアネスと心理的ストレス 岡村陽子, 高次脳機能研究, **32**(3), 438-445. 高次脳機能障害学会
- 荏原実千代・太田令子・岡村陽子・中島八十一・吉永勝訓(2012). 小児期発症の高次脳機能障害の支援実態調査報告 1—障害像 第49回日本リハビリテーション医学会学術集会
- 2012年度 NPO 法人 MSAK 研究会心と脳の臨床研究会 神経心理学検査法概説, 知能検査, 記憶検査, 注意検査, 前頭葉検査 講師
- 専修大学心理教育相談室一般公開講座 加齢が認知機能に与える影響と脳トレーニング 講師(5月, 10月開催)
- リハビリテーション心理職会 運営委員
- 大久保研究室(認知心理学)**
- 私たちの研究室では, 心の情報処理を研究しています。平成24年度の人員構成は, 教員1名, 大学院生2名(博士課程2名), 研究生1名, 学部生11名でした。今年度も大学院生と研究生は積極的に研究に励み, 学会で成果を発表し, 論文を公刊するなど意欲的に取り組みました。石川健太くんの論文「社会不安傾向者の視線方向判断: 表情と解釈バイアス」が, 日本心理学会の発行する論文誌「心理学研究」に掲載されたことが今年のハイライトだったでしょう。学部生は, 自分自身の卒業論文の完成に向けて, 研究に勤しみました。3年生がゼミ全体で行う協同実験に積極的に取り組んだことも印象に残ったできごとです。ビデオカメラを積極的に活用した実験を経験することでデータをとる楽しさを経験できたと思います。なお, 充実していたのは研究・学業だけではありません。今年もゼミ合宿ではしっかり温泉につかりました。さらに遊覧船に乗り, バーベキューを認知研究室一同で(そして, もちろんたくさんのOBと共に)楽しみました。教員が運転する車の前輪がバーストしたことを除き, 実に有意義な合宿でした。さらに, 昨年度に引き続き, みんなで屋形船を貸し切り, 東京湾で揚げたての天ぷらを食べ, しこたまお酒を飲んだのも今年の良い思い出です。
- 諸活動
- Okubo, M. & Ishikawa, K. (2011). Automatic semantic association between emotional valence and brightness in the right hemisphere. *Cognition and Emotion*, **25**, 1273-1280.
- Michimata, C., Saneyoshi, A., Okubo, M., & Laeng, B. (2011). Effects of the global and local attention on the processing of categorical and coordinate spatial relations. *Brain and Cognition*, **77**, 292-297.
- 大久保街亜・岡田謙介(2012). 伝えるための心理統計: 効果量・信頼区間・検定力. 勁草書房
- 石川健太・岡村陽子・大久保街亜(2012). 社会不安傾向者の視線 方向判断: 表情と解釈バイアス, 心理学研究, **83**, 225-231.
- Okubo, M., Kobayashi, A., & Ishikawa, K. (2012). A fake smile thwarts cheater detection. *Journal of Nonverbal Behavior*, **36**, 217-22.
- 大久保街亜(2012). ジェスチャーから言葉が生まれた: 言語のジェスチャー起源説. 日本語学, **33**, 16-26.
- 小林晃洋・大久保街亜(2012). 日本人参加者における作業記憶測定, 専修人間科学論集: 心理学篇, **2**, 27-34.
- 小林晃洋・大久保街亜(2012). Ubuntu, Octave, Psychtoolbox によるフリーウェア実験環境構築, 専修大学社会知性開発センター・心理科学研究センター年報, **1**, 89-108.
- Kobayashi, A. & Okubo, M. (2011). No attentional blink during arithmetic. OPAM 2011, Sheraton Seattle Hotel.
- Okubo, M., Kobayashi, A., & Ishikawa, K. (2011). Cheater detection and fake smile. The 52st annual meeting of Psychonomic Society, Sheraton Seattle Hotel.
- 小林晃洋・大久保街亜(2011). 処理資源の割りあてによる Attentional Blink の抑制. 日本基礎心理学会第30回大会, 慶應大学日吉キャンパス.
- Okubo, M. (2012). Leftward attentional biases in Framed-line Test among East Asians. The International Neuropsychological Society mid-year meeting in Norway 2012, Radisson Blu Scandinavia Hotel.
- 石川健太・大久保街亜(2012). 社会不安傾向者の表情認知における左右大脳半球機能. 日本心理学会第76回大会, 専修大学.
- 小林晃洋・大久保街亜(2012). 認知負荷量の測定とモダリティ効果. 日本心理学会第76回大会, 専修大学.
- 鈴木玄・大久保街亜(2012). 注意の瞬きにおける知覚的負荷の効果. 日本心理学会第76回大会, 専修大学.
- 大久保街亜・小林晃洋・石川健太(2012). 裏切りもの検知に表情表出の左右非対称性が果たす役割. 日本基礎心理学会第31回大会, 九州大学.
- 長田研究室(障害児心理学, 児童思春期メンタルヘルス)**
- 教員1名, 大学院生6名, 学部生4名で構成されています。ゼミ生は, それぞれ独自のテーマで研究を進め, 臨床実習を行うほか, 学会への参加(ポスター発表, ワークショップ参加など)を活発に行っています。
- 本研究室のチーフの研究課題は, 自閉症スペクトル障害の早期介入尺度および療育法の開発のほか, 児童期思春期の問題行動の評価および予防の開発です。研究の他, 自閉症スペクトル障害をはじめとする発達障害の乳幼児期の療育の実践と親のコンサルテーション, 教育現場の教師への発達障害への対応に関するコンサルテーションを定期的に行っています。
- 本年度は, 村松研究室(犯罪心理学ゼミナール)と合同で夏休みに2泊3日で伊豆へ合宿に行きまして。初日は我がゼミナールのプレゼンテーション, 2日目は村松ゼミナールのプレゼンテーションでした。普段ゼミナール間の交流

がない分、密度の濃い、多岐に渡ったディスカッションが展開されました。複数ゼミナールの合同合宿も刺激が多く、今後の研究テーマへの深まりも促進されるのではないかと思います。式晩連続の「ゼミ対抗麻雀大会」は我がゼミナールの連勝（僕ではなく、偏に学生の力！）、2日目のテニスは炎天下の中、学生の皆さんは活発に動き回っていました。2日目の夜のBBQは屋内（！）のおしとやかなものとなりましたが、虫さされを気にせずに良かったかなとも思います。

諸活動

長田洋和（印刷中）. ロヴァス法 (Lovaas Method), 応用行動分析療法 (Therapy with Applied Behavioral Analysis: ABA), アンガーマネジメント (Anger Management). 原仁, 上野一彦, 長田洋和, 笹森洋樹, 高橋あつ子編. 家庭で学校で使える発達障害辞典. 東京: 合同出版.

Osada, H., de Amorim, A. C., Velosa, A., Wan, W. P., Lotrakul, P., & Hara, H. (2012). Depression risks in mothers of children with developmental disabilities: a cross-cultural comparison of Brazil, Colombia, Malaysia, and Thailand. *International Journal of Social Psychiatry*. Published online: March 8, 2012.

長田洋和 (2012). 発達障害のスクリーニング. 子育て支援と心理臨床, **5**, 121-125.

Osada, H., Tachimori, H., Koyama, T., & Kurita, H. (2012). Longitudinal developmental courses in Japanese children with autism spectrum disorder. *Child Psychiatry and Human Development*, **43**, 895-908.

長田洋和 (2012). 少年非行と発達障害. 日本心理学会第76回大会シンポジウム (専修大学, 川崎).

平成23～25年度科学研究費助成事業 (学術研究助成金 (挑戦的萌芽研究)「一般人口および発達障害児における日本版CU特性スクリーニング尺度の開発」) 研究代表者

江戸川区教育委員会 特別支援教育専門家チーム (心理臨床)

日本乳幼児医学・心理学会 評議員, 編集委員

日本発達障害学会 評議員

第3回アジア・太平洋発達障害会議 準備委員

澤研究室 (学習心理学)

私たちの研究室では、主にヒトや動物が経験によって行動を変えていく学習という現象について研究しています。平成24年度は、教員1名、大学院生7名（博士課程3名、修士課程4名）、学部生9名という構成でした。昨年度までの研究を踏まえて、今年度もラットを用いた動因と刺激間競合の関連といった学習理論研究、恐怖反応の再発と抑うつとの関連といった臨床的応用に関わる研究を行うとともに、ウマを用いた強化刺激の研究のような比較認知科学的研究、パーキンソン病治療薬と衝動性の関連といった行動薬理学的研究を進めています。また、「動物研究をヒトで追試するプロジェクト」をスタートし、ハトの選択行動をヒトに置き換えたり、ヒト用放射状迷路を作成する実験などを計画しています。

諸活動

栗原彬・澤幸祐 (in press). 道具的条件づけにおける条件性制し訓練と興奮子消去の効果, 基礎心理学研究

澤幸祐 (2012). 古典的条件づけ. 心理学研究法, 誠信書房.

澤幸祐・栗原彬・永石高敏・沼田恵太郎 (2012). 学習と認知: 随伴性判断を中心に. 心理学研究法, 誠信書房.

Sawa, K. and Ishii, K. (2012). Conditioned flavor preference and the US postexposure effect in the house musk shrew (*Suncus murinus*). *Frontiers in Psychology*, **3**, 242. doi: 10.3389/fpsyg.2012.00242

Fujiwara, H., Sawa, K., Takahashi, M., Lauwereyns, J., Tsukada, M., & Aihara, T. (2012). Context and the renewal of conditioned taste aversion: The role of rat dorsal hippocampus examined by electrolytic lesion. *Cognitive Neurodynamics*, **6**, 399-407.

澤幸祐 (2012). 連合学習理論は擬鼠主義の産物か—表現論としての連合理論—, 動物心理学研究, **62**, 59-67.

Leising, K. J., Sawa, K. & Blaisdell, A. P. (2012). Factors that influence negative summation in a spatial-search task with pigeons. *Behavioral Processes*, **90**, 357-363.

宮下遥, 栗原彬, 澤幸祐 (2012). ラットの強制水泳手続きにおける恐怖反応の再発に及ぼす影響 日本動物心理学会第72回大会, 関西学院大学

下斗米研究室 (社会心理学)

下斗米研では、人の社会的環境への適応過程を研究しています。平成24年度の室員構成は、教員1名、大学院生1名（博士課程）、学部生12名（4年6名、3年6名）でした。今年度も、(1)理性的で快適な人間関係や集団の形成条件を見いだすこと、(2)対人関係や集団成員の苦悩防止と自己発達・成長方策の探索、(3)差別や排斥、葛藤や紛争なく、集団や個人らしさを大切に協力的社会を構築するための必要条件を見いだすこと、という3つの研究室伝統テーマのもと、調査や実験による研究活動が積極的に推し進められました。3年生もすでに卒業研究のためのデータを収集し、学生生活を送っています。研究成果は、*Social Psychology Bulletin of Shimotomai Laboratory*, Vol. 2, March, 2012において公刊されています。

新歓コンパ、3泊4日の夏合宿やピザ・パーティ、追いコン、加えて卒業生とのゼミ会など盛りだくさんの1年でした。

諸活動

著作

MacDonald, G., Marshall, T. C., Gere, J., Shimotomai, A., & July, L. (2012). Valuing romantic relationships: The role of family approval across cultures. *Cross Cultural Research*, **46**, 366-393.

小澤拓大・下斗米淳 (2012). 結果関連関与が意思決定におけるネガティブイティ・バイアスの強度に及ぼす影響: 将来自己と心理的安全装置の関連 専修人間科学論集第2巻1号 (心理学篇第2号), 9-20.

下斗米淳・小澤拓大 (2012). 対人関係における交換原理の

指標化の探索的検討：指標の比較分析を通して 日本心理学会第76回大会発表論文集, p. 70.

小澤拓大・下斗米淳 (2012). 自己犠牲の適応の検討(1)：動機・内容・相互依存の観点から 日本社会心理学会第53回大会発表論文集, p. 148.

下斗米淳 (2012). Geoff MacDonald 招待講演「Social Pain and Social Reward」企画者 日本心理学会第76回大会, SL(1).

下斗米淳 (2012). シンポジウム「健康行動促進をめざしたリスク認知とヘルスコミュニケーション」企画者・指定討論者 日本心理学会第76回大会, S(7).

下斗米淳 (2012). ワークショップ「現代青年の成熟とは何か」指定討論者 日本心理学会第76回大会, WS(17).

下斗米淳 (2012). シンポジウム「自己制御規範の心理学：3次元自己制御モデルの観点からの議論」指定討論者 日本パーソナリティ心理学会第21回大会, WS(4).

学会活動

日本社会心理学会理事

日本社会心理学会副編集委員長

第76回日本心理学会副委員長

社会活動

日本労働衛生総合研究所研究倫理委員

日本学術振興会専門委員

最高裁判所委員

山上研究室（発達心理学，比較発達・認知）

山上研では、平成23年3月に3名の卒業生（草柳有沙さん、山下花緒さん、小林奈津美さん）を輩出しました。内、山下さんは本学大学院に進学しました。また4月には5名の新3年生を迎え、4年生4名、5年次以上3名の総勢12名となりました。

平成23年3月15日には、総ページ数89ページの専修大学山上研究室年報 *Annals of Yamagami Laboratory* Vol. 2を刊行しました。今号は、4年生の卒業論文に加えて5本の研究法論文を掲載しました。また、実習助手の榎本さんによる「道具の身体化における諸問題—身体表象可塑性の観点から」が掲載されました。さらには、初めての試みとして毎年実施している夏のプレゼンテーション合宿の手引きも巻末に資料として掲載しました。

なお今年度も夏合宿での研究発表をUstreamで中継生放送しました。各人の15分間の発表風景は、後輩などの参考になるように同サイトで保存してあります。

今年度は日本心理学会第76回大会が生田キャンパスで開催されたこともあって、山上研の学生からの一般発表は山下花緒さんを筆頭とする1本のみとなりました。

今年度は新学期から研究法1, 2の授業において、授業日（木曜日）の0時までに発表者は発表用資料（ハンドアウト）をPDF化して、研究室メンバーが共通にアクセスできるクラウドサービスにアップロードすることを求めることにしました。研究室メンバーは全員、木曜日の13時までにはアップロードされた資料に必ず目を通すこと、そしてちゃんと読ん

だことはTwitterで宣言することを必須としました。聴衆としての授業参加がややもすれば受動的になる傾向の改善につながったと考えています。

諸活動

栗原彬・山上精次・澤幸祐 (2011). 反応時間課題における主観的予測と行動の乖離：延滞条件づけと痕跡条件づけを用いた検討. 日本基礎心理学会第30回大会発表 1G04.

榎本玲子・山上精次 (2011). 身体近傍空間知覚における道具仕様の影響に関する検討. 日本基礎心理学会第30回大会発表 1L16.

山上精次 (2012). 心理学研究室の近現代史と2012年日本心理学会大会, *Annals of Yamagami Laboratory*, **2** (1), p. 1-2.

山上精次・高砂美樹・サトウタツヤ・鷺見成正・溝口元 (2012). 1912年とこの100年の心理学の展開. 日本心理学会第76回大会シンポジウム S(11).

榎本玲子・山上精次 (2012). 身体性を有した道具の使用による身体表象の変容に関する研究. 日本心理学会第76回大会発表論文集 p. 530.

山下花緒・榎本玲子・山上精次 (2012). 両耳分離聴による色聴共感覚の検討. 日本心理学会第76回大会発表論文集 p. 618.

榎本玲子・山上精次 (2012). 道具使用による身体近傍空間の拡張の様相に関する研究. 日本基礎心理学会第31回大会発表 1AM5.

社会的活動

学校法人専修大学 評議員

社団法人日本心理学会 代議員

日本基礎心理学会 常務理事・編集委員長

独立行政法人大学評価・学位授与機構 文学・神学専門委員会心理学部会委員

Ⅲ. 卒業論文題目

平成24年12月17日に、45名の4年生が卒業論文を提出し、単位が認定されました。以下に、学生氏名と論文題目（指導教員名）を記し報告致します。

藤田 美貴 ライバルの特性が嫉妬感情に及ぼす影響—精神的裏切りおよび肉体的裏切り場面における男女の性戦略（山上）

相澤 由紀 集団極性化場面での生起感情とその後の集団へ対する魅力—集団同一視と集団特性の観点から（下斗米）

中村 玲美 カレン・カーペンターと拒食症（高田）

相原 純平 フィードバックの種類が後のリスク選択に及ぼす影響と加齢の効果（澤）

沖田 青馬 青年期における自己愛性人格傾向と対人依存欲求傾向との関連性について—質問紙法及びロールシャッハ・テストを用いて（藤岡）

鈴木 彩夏 青年期心性としての満たされ感類型におけるメカニズムの研究—構造および自己への心理的影響の理解へ向けて（下斗米）

- 光地 美穂 ワーク・ファミリー・コンフリクトについてのメタ分析および欧米との比較 (岡田)
- 石黒 良和 幼児の感情的役割取得と対人的問題解決から予測される対人行動 (山上)
- 伊藤 春香 親子関係・対人恐怖心性が作り笑いに及ぼす影響について (乾)
- 斎藤 智 色付き眼鏡着用時における気分の変化および作業効率への影響 (岡村)
- 岩切彩恵子 色の選択と気分状態の関連性について—マンダラ塗り絵を用いて検討する (高田)
- 関根 岬 恋愛傾向とストレスコーピング形態との関連 (乾)
- 下地 里枝 いじめ場面と自尊感情によるいじめ対処行動の差異 (岡村)
- 木内 慶太 自我漏洩感とバウムテストとの関連 (高田)
- 田中めぐみ 言語化容易性が選好に与える効果 (大久保)
- 荒井 直人 印象に影響を及ぼす表情と服装の相互作用 (中沢)
- 奥村 奈央 青年期における居場所感—友人関係様式と友人関係満足度に着目して (谷田)
- 森 有生 手の絵の認知と統合失調型パーソナリティ特性との関連 (乾)
- 大野 知昭 視覚的文脈手がかりと注意の補足の相互作用の検討 (大久保)
- 樋口 珠恵 精油の香りの記憶に及ぼす親近性・嗜好性・連想の影響 (中沢)
- 岸本 健 親の養育態度とポジティブイリュージョン、抑うつとの関係について—親の養育態度の満足度の違いから (谷田)
- 猪山 美穂 大学生に対する心臓音と音楽による癒し効果の検討 (岡村)
- 山上 希織 大学生の趣味が抑うつと幸福感に及ぼす影響 (山上)
- 渡邊 杏沙 仮想的有能感と家族関係—いじめの心理と背景について (乾)
- 下條 愛美 間接的な方法における健常大学生の障害観、障害者観の変化について (岡村)
- 中村有紀子 大量殺人事件の分類と加害者属性の推定 (越智)
- 星野 良太 近年の日本における殺人事件犯の男女別犯行特性とその類型 (越智)
- 藤野 未緒 背景色が再生課題に与える効果—回避動機と接近動機の側面から (大久保)
- 五十嵐 黎 Frida Kahloの痛みと自画像 (高田)
- 波田野結花 効果量に基づく結果と古典的な仮説検定における結果との乖離の程度について—『教育心理学研究』を用いて (岡田)
- 外岡 慎 共感性の構造とその対人コミュニケーション機能に関する研究—対人関係性とセルフ・モニタリングを規定因として (下斗米)
- 平尾 和也 懸念的被透視感に含有される感情による懸念的
- 被透視感の生起要因および対処行動に関する研究 (下斗米)
- 上原 直之 視覚刺激に伴う犯罪不安感に影響を及ぼす諸要因に関する研究 (越智)
- 二瓶 彩 ボディソニック音楽聴取における音と振動の同期の有効性 (中沢)
- 石井 菜摘 家庭問題をめぐる外集団から与えられる二重の苦悩に関する研究：ステレオタイプや偏見とサポート要請の観点から (下斗米)
- 日下祐衣子 ジェンダーと食行動異常の関連における自分描画法による検討 (乾)
- 大沢 理紗 乱雑な空間は論理的思考を妨げるか (中沢)
- 井竹 萌美 太宰治と思春期心性—太宰はなぜ若者に好かれるのか (高田)
- 江澤 佐知 虚記憶に刺激呈示様式が果たす役割—画像と文字の比較 (大久保)
- 杉山 博紀 大学生の自己愛傾向と抑うつ及び攻撃性の関連について (越智)
- 小松久美子 事象関連電位による虚偽生成過程の分析 (石金)
- 山田千恵美 自己決定理論における動機づけ概念の比較—学校段階と対象行動の差異についてメタ分析による検討 (岡田)
- 船水 未来 親密化過程における交換原理の推移と原理成立要件としての共感性機能について—対人関係の良好さの発生基盤に関する研究 (下斗米)
- 関谷 実穂 ADHD傾向をもつ大学生が抱える二次障害の因果関係についての検討 (岡村)
- 長谷健太郎 Franz Kafkaの分裂病的資質 (高田)

IV. 優秀卒業論文

次の4編が優秀卒業論文に選出されました。研究室として書状を贈呈し、栄誉を永く讃えます。

- LP21-0005H 鈴木彩夏 (指導教員：下斗米淳)
- LP21-0008B 石黒良和 (指導教員：山上精次)
- LP21-0037H 波田野結花 (指導教員：岡田謙介)
- LP21-0053G 小松久美子 (指導教員：石金浩史)

V. 修士論文題目

平成24年1月11日に、11名が修士論文を提出し、論文審査と口述試験ともに合格し、修士(心理学)の学位が授与されました。以下に、大学院氏名と論文題目(主・副指導教員名)を記し報告を致します。

- 大塚 志織 マスタリーが育児ストレスとソーシャルサポートに与える影響—母親の就労形態の違いから (長田・大久保)
- 木島 直人 離人感とラバーハンドイリュージョンの関連性について (藤岡・澤)
- 高岡 陽子 青年期の友人に対する自己開示と精神的健康

- (乾・下斗米)
 新井悠莉恵 食行動に影響する自己意識と他者との関連
 (乾・山上)
 森 綾香 ネガティブ感情下でのセルフモニタリング能力
 の変化と性格特性との関連 (岡村・石金)
 湯浅 麻衣 大学生における星と波テストと自我同一性およ
 び気分との関連 (高田・中沢)
 野原 知世 青年期における失恋後の肯定的な心理変化と関
 連する要因についての検討 (高田・下斗米)
 松平 周輔 事前の自己呈示が課題に対する不安に及ぼす影
 響について—主張的セルフ・ハンディキャッピングと自己
 卑下呈示からの検討 (藤岡・中沢)
 菅原 美穂 中心視・周辺視における視線方向判断と個人内
 要因の関連 (長田・山上)

- 柴田彩也子 見捨てられ不安および自己愛が抑うつ感の表出
 に及ぼす影響 (高田・中沢)
 宮下 遥 ラットの強制水泳手続きが恐怖反応の再発に及
 ぼす影響 (澤・石金)
 平 明子 ストレス体験過程におけるポジティブ感情につ
 いて (藤岡・岡田)

VI. 研究室専任教員異動

乾吉佑教授が平成24年度をもって定年を迎えられ退職され
 ました。学術面と共に、社会的活動、及び研究室運営に多大
 なるご功績をなされましたことに対して、研究室一同より深
 謝を申し上げます。

また、次頁の通り、これまでの研究室専任構成員の在職歴
 を表に示します。

